〔富岡鉄斎と近代日本画展によせて〕

菱田春草筆「晩秋図」をめぐって

近代の日本画を代表する画家の一人に菱田春草がいます。明治七年(1874)に長野県の飯田市に生まれ、明治四十四年(1911)に三十八才の若さで夭折しました。春草は明治二十二年に上京して結城正明に師事し、その翌年に東京美術学校に入学しました。横山大観、下村観山は一年先輩にあたります。東京美術学校では同年の十月に弱冠二十九才の岡倉天心が東京美術学校長に就任しています。以後、春草は天心の薫陶をうけ、明治の新しい日本画の創造に貢献しました。明治三十一年には大観、観山とともに日本美術院の創立に加わっています。

大和文華館では春草の「晩秋図」を所蔵しています。この作品では秋の夕暮れの森を描いています。暮れかかる空に鳥の群が舞い、森の木々は既に葉を落し始めています。夕陽の柔らかい逆光線を淡い朱と淡墨の諧調によって巧みに捉え、画面には光と大気がもたらされています。鑑賞者は落日の茫洋たる光に包まれ、いつしか感傷的な気分に導かれます。光と大気の表現は西洋絵画から学んだものですが、自然の中にとけ込んでいくような叙情性には、極めて東洋的な美意識が表われています。

この作品には、画面の右下に「春草」朱文円印が捺されています。この印が用いられる最も早い時期の作品は、明治三十四年に描かれた「白牡丹図」(山種美術館蔵)です。この印は徐々に円の右上の部分が欠け、「晩秋図」では欠損がかなり進んでいます。同様の印は明治四十二年に描かれた「苦行」に認められますので、おそらく同時期の作品と考えられます。春草は三十五才、短い彼の生涯では晩年にあたります。網膜炎による失明の危機から免れ、心機一転して制作を再開した時期です。この年の十月に著名な「落葉」(永青文庫蔵)を文部省第三回美術展覧会に出陳し、二等賞第一席を得ました。「落葉」によって春草の名は全国に知られ、ようやく作品の注文が多くなります。おそらく「晩秋図」もそういった作品の一つと思われます。

春草は自作の「落葉」に関して、翌年の三月に『時事新報』に次のように述べています。「(前略)速やかに改善すべきは従来ゴッチャにされて居た距離ということで、これは日本画も洋画と同様大に考えねばなるまい。自分も始終この事は注意していた積もりだが、この大切な法則が動ともすると画の面白味ということと矛盾衝突するところから、遂それの犠牲になってしまう。『落葉』にもそうしたことが多かった。(後略)」。ここで問題にしている「距離」とは、作品と鑑賞者の距離と作品に描かれた絵画空間との関係を指しているのでしょう。この記事によって、春草が絵画の距離感に特別な関心を持っていたことがわかります。

確かに春草作品には特有の距離感があり、作品の叙情性と深く結びついています。多くの作品では、静かな空間の向こうにある光景を描いています。春草が初めて公共の展覧会に出品したのは、明治二十九年(1896)の九月に開かれた日本絵画協会第一回共進会です。第三部に「四季山水」を出品し、銅牌第四席を得ました。この最も初期の作品においても、既に春草特有の叙情的な距離感が認められます。

「四季山水」は郊外の景観を四季にわけて描いています。この「夏」で思い出される作品が大和文華館にあります。北宋時代後期の宗室出身の画家、趙令穣が描いた「秋塘図」です。一見して、画面構成から画趣にいたるまで両作品は非常に近いことがわかります。「秋塘図」には一通の書状が附属しています。明治三十四年(1901)に狩野謙柄氏より原富太郎氏へ宛てた譲状です。狩野謙柄氏は狩野常信から数えて九世の孫にあたります。この譲状によると、伊達家から常信に下賜されて以来、木挽町狩野家の門外不出の家宝であったこと

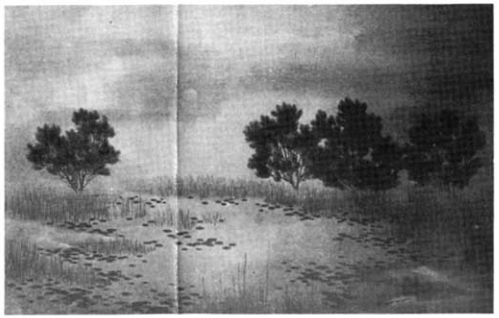
趙令穣筆　秋塘図

がわかります。しかし、この作品は明治二十六年の二月に発行された国華四十一号に「江汀群鳧図」として紹介されています。当時、春草は東京美術学校の本科の二年に在籍していました。岡倉天心は生徒たちに古画学習を盛んに奨励しましたが、国華はその岡倉天心が高橋建三とともに創刊した美術専門雑誌です。おそらく春草は国華誌上において「江汀群鳧図」を見ていたことと思われます。この三年後に「四季山水」が描かれました。ただし、国華に掲載されたのは模写の木版画です。「夏」の清澄な色感は、意外にも木版画の色感を踏襲しているのかもしれません。興味深いことに、「秋塘図」の下半分を隠せば、晩年の作品である「晩秋図」とも趣が似ています。春草がこの作品に自らの芸術性にかかわる何かを見出したとすれば、一枚の木版画が春草の生涯にわたって大きな影響を与えたことになります。

(中部義隆)

菱田春草筆　晩秋図

菱田春草筆　夏(四季山水のうち)



秋塘図木版画(国華四十一号掲載)

季刊 美のたより No.130
平成12年 2 月17日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.